第79回生学年通信 No.005

喜べば。

2024/05/30(thu)

初めての定期考査も終わり、１学期も後半に入りました。

文化祭も来月半ばに控え、また、部活動では３年生の先輩たちの最後の大会も日が迫っています。精一杯声援を送るとともに、来年、再来年の自分たちを想像し、先輩方の勇姿を目に焼き付けておきましょう。

【６月の行事予定】

３日（月）キャンパスカウンセリング
３日（月）「アート de エール」展（21日（金）まで）
10日（月）キャンパスカウンセリング
12日（水）文化祭準備（４時間目以降）
13日（木）文化祭①（午前：文化部発表、午後：準備）
14日（金）文化祭②（午前：合唱コンクール、午後：展示・模擬店・素人名人会）
17日（月）キャンパスカウンセリング
24日（月）キャンパスカウンセリング
26日（水）生徒会選挙
28日（金）期末考査（７月４日（木）まで）

先週の続き。「文字の書けない子どもたち」がどうして生まれて来たのかについて武道的立場から考察したいと思う。

筆で字を書く時にかなり精密な身体運用が求められる。能筆（のうひつ）の人は横に一本線を引く時も、勢い、太さ、濃淡を細かく変化させながら筆を運ぶことができる。

最後の首切り役人だった八世山田朝衛門（あさえもん）は斬首（ざんしゅ）の一閃（いっせん）の間に涅槃経（ねはんきょう）を唱えたと後年述懐している。右手の人差し指を下ろす時に「諸行無常」、中指を下ろす時に「是生滅法（ぜしょうめつほう）」、薬指を下ろす時に「生滅滅已（しょうめつめつい）」、小指を下ろす時に「寂滅為楽（じゃくめついらく）」。そこで首がぽとりと落ちるのだそうである。一瞬の動作を四句十六文字に分節していることになる。斬ることの本質が力ではなく、動作の精密さと多分割にあることがよくわかる逸話である。

精度の高い身体運用をなしうることは生きる上での必須の能力である。それができなければ、包丁で葱を刻むこともできないし、針の穴に糸を通すこともできないし、文字も書けない。しかし、どうやらその基礎的な「生きる能力」が今の子どもたちは衰えているらしい。

文字なんか書けなくても、キーボード叩けば済む。葱（ねぎ）だって刻んだものを売っているし、靴下の穴なんかけちくさく繕（つくろ）わずに買い替えればいい。そうかも知れない。でも、身体の構造が崩れて、細密動作ができないという子どもたちを制度的に創り出しているかもしれないという危機感を大人たちは持った方がいい。

文字を書くというのは、罫に沿って、あるいはます目に合わせて、複雑な図形をかたちよく配列することである。字間調整も必要である。おそらく古人は子どもたちが書字によって身体の精密な運用を学び、生きる力を高めるということを知っていたのだろう。だから、子どもたちに「黙って臨書しろ」と命じたのだと思う。今さら習字を必修にすることはできない。

では、どうしたらいいのか。私にもわからない。

（内田樹の研究室「文字の書けない子どもたち」2024-02-27）

上は、中間考査前に配布した前号で紹介した、テストでの、学生が書く文字から連想される内田樹さんの文章の続きです。興味があれば、時間のあるときに読んでみてください。（「首切り役人」の話は些（いささ）か残酷なような気もしたのですが、死刑制度を存置する日本に住む我々としては目を背けられない話かと思い、省略せずに紹介しました。）

（ホームページでは省略）

上は、新聞に大きく取り上げられた、武術太極拳で活躍する丸山響生さん（２組）の記事です。来月の文化祭では、素人名人会の舞台で演舞を披露してくれるそうです！

その他にも、各運動部の総体で活躍する１年生の話が耳に届きます。勉学、部活動、行事と、多方面での皆さんの活躍をこれからも期待しています。

三井住友信託銀行から「公益信託カトリック・マリア会・セント・ジョセフ奨学育英基金奨学金」の案内が届きました。詳細は担任にお尋ねいただくか、インターネットで検索なさってください。応募期間は７月５日（金）まで。月２万円の給付（返済不要）。全国で47名程度の募集です。